

〔論文〕

教師を目指す学生の理想的教師像に及ぼす性格的要因

菊 野 春 雄

Haruo Kikuno

静岡産業大学
経営学部

菊 野 雄一郎

Yuichiro Kikuno

長崎大学
医学部

李

琦

Qi Li

東京大学
文学部

山 田 悟 史

Satoshi Yamada

静岡産業大学
経営学部

本研究の第一の目的は、教師を目指す大学生が理想とする教師像とはどのようなものかを明らかにすることであった。理想とする教師像については、PM理論のP機能とM機能を用いて測定した。第二の目的は、大学生の性格特性が、理想とする教師像にどのように影響しているのかを明らかにすることであった。性格特性についてはビッグファイブ理論で仮定されている勤勉性、外向性、情緒安定性、協調性、開放性の5要因を測定した。その結果、大学生はP機能よりもM機能の強い教師になることを理想としていることが認められた。しかし、高校生を調査協力者とした過去の研究では、M機能よりもP機能の強い教師を期待していることが認められている。このように研究間で結果が矛盾している原因として、高校生と大学生の視点の違いが、理想とする教師像の違いを生じたのだと仮定された。また、性格特性と教師像の関係について、外向性、情緒安定性、勤勉性の強い学生は、M機能だけでなく、P機能の強い教師を理想とすることが認められた。また、協調性の強い大学生はM機能の強い教師になることを期待し、開放性の強い学生はP機能の強い教師になることを期待していることが認められた。これらの結果については、学生の持つ性格特性が、教師への異なった価値観をもたらし、その価値観が理想とする教師像に影響したのだと解釈された。

キーワード：教師像、性格特性、ビッグファイブ、PM理論、教員養成

問題と目的

大学などで多くの学生が教師を目指して学んでいる。どのような教師像を理想として、教師を目指しているのだろうか。特に本研究では、教師を目指している学生は、どのようなリーダーシップを持った教師を理想としているのか検討した。また、理想とする教師のタイプに学生の性格特性がどのように影響しているのかを検討した。

1. 教師と性格特性

まず、教師と性格特性の関係について考えてみたい。教師を目指す学生はどのような性格的特徴があるのだろうか。教員を目指さない学生とはどのように違うのだろうか。この点について、亀川（2005）は、大学で日本語養成講座を受講している学生と講座を受講していない一般学生の性格を比較し、日本語養成講座受講の学生はどのような性格的特徴を持っているのかを調べている。その結果、日本語養成講座受講の学生は、一般学生に比

べ意欲、責任感、熱心さ、面白さで有意に高かった。この結果は、日本語教師を目指している学生は、自分自身を意欲的で、責任感が強く熱心であり、自身を面白い人間であるとみなす傾向があることを示唆している。

ところで、教師は授業中に机を触ったり、黒板を使ったり、書類を触るなど色々な行動をとる。このような教師の行動が、生徒の授業理解に影響する可能性がある。授業中に教師がとる行動と教師の性格に何らかの関係があるのであるだろうか。河野（1987）は、授業分析のために、教師の姿勢の種類と頻度を調べ、それと性格特性との関係を調べている。教師の行動を測定するために、2分間の授業中に教師が何種類の姿勢を示すのかという姿勢の種類数と何回姿勢を変えたかという変化数を調べている。その結果、男性教師の場合、自尊感情が高いほど姿勢の種類は少なかった。女性教師の場合、愛情と同情的理解のある調和的關係を保てる程度が高い教師ほど姿勢の種類は多かった。また、顕在不安が高い教師ほど、姿勢の種類数と変化数が多かった。これらの結果は、教師の授業中に行う姿勢は、教師の性格と関係が見られることを

示している。

さらに、河野（1988）は、Y G 性格検査を用いて、姿勢の種類と変化数と性格との関係を調べている。その結果、一般的活動性の高いものほど姿勢の変化数が多かった。また、姿勢を後述するA群からG群の7種類に分けて、性格特性との関係を分析している。A群の姿勢とは、直立した姿勢を基本にした姿勢である。B群の姿勢とは、手が机に接触している姿勢である。C群の姿勢とは、授業用の教科書・メモなどの資料に触っている姿勢である。D群の姿勢は、身振りをともなった姿勢である。E群の姿勢とは、は黒板の利用に関する姿勢である。F群の姿勢とは、片腕あるいは手首をつかむ姿勢である。G群の姿勢とは、転移動作と呼ばれる姿勢である。これらの姿勢と性格特性との関係を分析したところ、A群の姿勢については、神経質、非協調性、攻撃的、のんきさ、社会的外向、気分の変化、主観性、支配性、劣等感との間で有意な相関が認められた。B群の姿勢については、抑うつ性、劣等感、神経質、活動性、客観性との間で有意な相関が認められた。D群の姿勢については、思考的外向、支配性、社会的外向、抑うつ性との間で有意な相関が認められた。これらの結果から、授業中に教師がどのような姿勢をとるかは、それぞれの教師の性格特性と関連していることを示している。

また、子どもが学習する上で、学習自体が面白いと感じるような内発的動機づけは重要である。そして、この内発的動機づけを支援する大きな役割を教師は持っている。どのような教師が子どもの内発的動機づけを支援できるのであろうか。教師の性格が関係しているのであらうか。杉原・桜井（1987）は、教師の性格特性と子どもの内発的動機づけの関係を調べている。その結果、子どもの成長を助けようとする教師における養護という性格特性と子どもの内発的動機づけ、特に知的好奇心との間に相関が認められた。また、攻撃という性格傾向は知的好奇心と達成傾向との間に相関が認められた。さらに、教師のリーダーシップと子どもの内発的動機づけとの関係を調べている。その結果、P機能と内発的動機づけの間に有意な関係は認められなかった。しかし、M機能と内発的動機づけの間に有意な関係が認められた。これらの結果は、教師の性格特性が、子どもが内発的動機づけを持つために重要な要因であることを示唆している。

以上の研究結果から、教員を目指す学生、教師の授業中に行う姿勢、子どもの内発的動機づけを促進する教師に、性格的な特徴がみられることを示している。教師の性格特性を明らかにすることが、教師の特徴や適性を解明するためにも重要であることが明らかになった。

2. 理想とする教師像

それでは、生徒や学生、教員を目指す学生、保護者、教師はどのような教師を望んでいるのであろうか。教師との距離や立場から教師像は異なることが予想される。また、それぞれの性格など個性によって、理想とする教師像は変化するのであろうか。

（1）生徒や学生の求める理想的教師像

学校で教えられる立場である生徒はどのような教師を理想としているのであろうか。小柴・武田・村瀬（2014）は、中高生がどのような教員を求めているのかについて質問紙調査を行っている。その結果、中高校生が理想とする教師像の最上位は、「わかりやすい授業をしてくれる先生」であった。教師への要望としては、高校生より中学生の方が高く、男子よりも女子の方が教師への要望は高かった。

保坂（2003a; 2003b; 2004a; 2004b）は、中学生と高校生がどのような英語教師を理想とするかを調べている。保坂（2004a）によると、保坂（2003b）は、中学生のデータから、中学生の理想的な英語教師の因子として8つの因子を抽出している。すなわち、「カウンセリング・マインドで生徒に接し、学力をつける授業をする」「英語の高い運用能力を持ち、コミュニケーション能力が楽しく授業をする」「知識・教養が豊かで質の高い授業をする」「厳しく指導し英語力をつける」「生徒の立場に立った授業をする」「人間性がすぐれ、生き方を考えさせる授業をする」「総合的な英語力がある」「授業と関係ない話をする」の要因であった。

また、保坂（2003a）は、高校生のデータから理想的な英語教師の因子として6つの因子を抽出している。「受験学力がつく質の高い授業をする」「知識・教養が豊かである」「生徒の立場に立った授業をする」「カウンセリング・マインドを持って生徒に接する」「厳しい指導で英語力をつける」「英語の高い運用能力を持つ」の要因であった。中学生と高校生では、理想とする教師像の因子の数は異なるが、「知識・教養が豊かである」「生徒の立場に立った授業をする」「カウンセリング・マインドを持って生徒に接する」「厳しい指導で英語力をつける」「英語の高い運用能力を持つ」の4つの共通した因子が認められている。

さらに、保坂（2004a）は、高校生と中学生のデータを比較することで、生徒の考える理想的な英語教師像を分析している。その結果、以下のことが明らかになった。（1）中学生の方が多様な英語教師観を持っている、（2）中学生の方が教師の人間的な側面に対する評価が高い、（3）中学生の方が教師の英語の運用能力を重要視し授

業での活用を期待している、(4) 中学生で中1、高校生では高2、3が指導上注意をする教師、(5) 中学生・高校生ともに入試に対応できる英語力をつけてくれる授業、さらにわかりやすい授業を望んでいる。

保坂(2004b)では、高校生を調査協力者として、三隅のPM理論との関係から生徒にとっての理想的教師像を検討している。リーダーシップの理論であるPM理論(三隅・吉崎・篠原, 1977)を用いて測定した。PM理論はリーダーシップに関する理論で、リーダーシップには集団の目標を達成するP機能(Performance: 以下P機能)と集団のメンバー間の問題を解消するM機能(Maintenance: 以下M機能)で構成されていると仮定するものである。生徒全体として、P機能とM機能が複雑に絡み合った形で影響することが明らかになった。次に成績に基づいて分析したところ、成績上位の高校生は、主としてP機能的要素の強い指導力を期待していた。他方、成績下位者の高校生は、P機能的要素とM機能的要素の強い指導力を期待していた。高校生では、成績などによって、理想とする教師像が異なることを示している。

紅林・中村・井上・長谷川(2012)は、小学生に教師の資質を質問している。子どもによる教師のとらえ方については、2つの因子が抽出された。(1)叱ってくれる、勉強を教えるなど一般的に考えられている教師の役割に関する「先生の仕事」の因子、(2)すぐに許してくれる、面白いことをいうなど「甘さ」の因子であった。このことから、子どもはしっかり教育をしてくれて、安心して自分を任せることができるとの観点と、甘いかどうかという観点で教師を見ていることを示している。

次に、教師になることを希望している大学生はどのような教師像を持っているのであろうか。松永(2015)は、幼稚園・小学校教員免許状の取得を希望する学生を対象に理想とする教師像を調べている。その結果、教師は厳しいだけでなく、基本的には優しい教師を求めていることが認められた。そして、親身になって子どもの相談に乗るなど、距離の近い教師を理想的な教師像としていることが認められた。

教員を目指す学生と教員を目指さない学生で理想とする教師像は異なるのであろうか。この点を検討するために、石崎(2014)は教育実習に行かない非教育実習生と教育実習生を調査協力者として、教師の資質能力について質問している。その結果、非教育実習生に比べ教育実習生の方が、教職に対して高い理想像を持っていることが明らかになった。そして、教育実習を経験しても、理想像は大きく変化しないことも明らかになった。この点について、理想のモデルとなる教員と出会えなかったな

どが原因であると考察している。

(2) 教師の求める理想的教師像

さらに、教育現場にいる教師はどのような教師像を理想としているのであろうか。山根・木多(2013)は、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の校長などに、「理想の教師像」について質問をしている。その結果、全校種の学校長が重要と考えている資質能力は、「豊かな人間性や社会性」と「コミュニケーション力」であった。幼稚園園長と小学校校長は、「教職に対する責任感、探求力、教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力」に関して多く発言した。他方、中学校校長や高等学校校長は、「専門職としての高度な知識・技能」に関する発言が多かった。これらの結果は、教える子どもの年齢によって、教師の理想像が異なることを示している。

また、紅林・中村・井上・長谷川(2012)は、小学校の教師による教師の資質を質問している。その結果、教師による資質のとらえ方については4つの因子が抽出された。(1)前向きで、万能的で、アクティブな自己に関わるジェネラリスト的な特徴に関する観点、(2)授業実践に関わる観点、(3)子どもや社会とのつながりに関する観点、(4)コミュニケーションに関する観点を因子であった。このことから、教師は教師の仕事を、ジェネラリストと授業者とコミュニケーションの4つの観点から見ていることを示している。

豊田・三木(1996)は、教職を目指す大学生と現職教師に、理想的な教師の特徴を記述させている。その結果、大学生は、教師の人間性に関する特徴を理想的教師像において重視していた。他方、現職教師は、児童や生徒の理解を重視していることが認められた。

(3) 保護者の求める理想的教師像

子どもを教えられる保護者にとって理想的な教師像とはどのようなものなのだろうか。紅林・中村・井上・長谷川(2012)は、小学生の保護者に教師の資質を質問している。

保護者による教師のとらえ方については3つの因子が抽出された。(1)対応力やコミュニケーションに関わる「柔らかな頼りがい」因子、(2)授業や生徒指導に関わる「指導」因子、(3)腕力や権威の姿勢、厳しさに関わる「強さ・信念」因子であった。これらのことから、保護者は教師の果たすべき役割として、指導に関わる、柔らかな頼りがいがあり、信念を持った強さがあるかどうかの観点で教師を見ていることを示している。

3. 研究目的

そこで、本研究では、第一の目的として、教員を目指す大学生が理想とする教師像とは何かを明らかにしようとした。第二の目的として、学生が理想的教師像に対して、学生の性格的要因がどのように影響しているのかを明らかにしようとした。

教員を目指す大学生が理想とする教師像については、PM理論によるP機能とM機能を測定することにより、学生がP機能とM機能のどの機能を重視するのかを明らかにしようとした。これまでの研究では、保坂（2004b）が、高校生を調査協力者として、PM尺度を用いて理想とする教師像を調べている。その結果、成績上位の高校生は、主としてP機能的要素の強い指導力を期待し、成績下位者の高校生は、P機能的要素とM機能的要素の強い指導力を期待しているとの結果が得られた。教えられる立場の高校生と教員を志望する大学生では、教育についての視点が異なる。この視点の違いが、理想とする教師像に違いが見られるだろうか。

また、学生の性格特性としてはビッグファイブ（Big Five）理論で仮定される5要因を調べる尺度（青木, 2011）を用いた。ビッグファイブ理論とは、性格は「勤勉性（conscientiousness）」「外向性（extraversion）」「情緒安定性（neuroticism）」「協調性（agreeableness）」「開放性（openness）」の5つの因子で記述できるという仮定される理論である。教員を目指す大学の理想とする教師像については、将来自分が教師なることを基本と考えていると仮定される。これらのことから、学生が自分はどのような教師に向いているのかも考慮すると仮定され、5つ性格特性の要因が理想とする教師像に影響するのではないかと予想された。

方 法

調査協力者：調査協力者は、教員養成課程に属し、中学・高校の教員免許状の取得を希望し教員を目指す大学生49名であった。

調査手続き：調査対象者に調査用紙を渡し、調査の協力を依頼した。調査を依頼する際、調査協力者に対して、本研究の目的を説明し、調査協力者には調査を同意・拒否する権利があること、調査データに関して匿名でなされ研究者には守秘の義務があること、研究結果を社会にフィードバックするため学会誌等に公表することを説明し、調査参加を依頼した。なお、調査を拒否したい場合は、調査は匿名で個人が特定されないこと、成績等に影響しないこと、調査用紙については提出する必要がないことなどを説明した。その結果、49名中49名全員から

回答を回収した。

調査内容と調査尺度：調査項目は、調査説明文、フェースシート、教師用のリーダーシップについての質問項目、性格特性の質問項目で構成されていた。

説明文では、研究者倫理に基づいて、研究題目、研究の目的、研究データの使用される範囲、守秘の義務、社会的フィードバックについて記述した。また、フェースシートでは、調査協力者の性別、きょうだい数、出生順序、教諭免許状の種類についての質問を行った。

理想とする教師のリーダーシップについては、三隅・吉崎・篠原（1977）の作成した学級担任教師のPM式指導行動の測定尺度を用いた。この尺度では、P項目とM項目のそれぞれ5項目の合計10項目で構成されていた。たとえば、P項目では「忘れ物があると注意する」や「宿題などをきちんとするように厳しく言う」などの項目が含まれていた。他方、M項目では、「子どもと一緒に遊ぶ」「全ての子どもを同じように対応する」などの項目が含まれていた。これらの質問項目に対して、被調査者がどのような教師になりたいかを、5つの選択肢から1つを回答させた。回答は、「全く当てはまらない」から「大変よく当てはまる」の6件法で答えを選択するようになっていた。

また、性格特性を測定するビッグファイブは、青木（2011）の質問紙を用いた。たとえば、「外向性」では、「他の人と比べると話し好きです」や「どちらかというと地味で目立たない方です」などの項目が含まれていた。「協調性」では、「思いやりがある方です」や「親しい仲間でも、本当に信用できません」などの項目が含まれていた。「勤勉性」では、「問題を綿密に検討しないで、実行に移すことが多い」や「どちらかというとのんきな方です」などの項目が含まれていた。「情緒安定性」では、「どうでもいいことを、気に病む傾向があります」や「自分で悩む必要のないことまで心配する」などの項目が含まれていた。「開放性」では、「将来のことを見通すことができる方です」や「難しい問題にぶつかると、頭が混乱することが多い」などの項目が含まれていた。回答は、「全く当てはまらない」から「大変よく当てはまる」の6件法で答えを選択するようになっていた。

結 果

1. 理想とする教師像

（1）理想とする教師のリーダーシップの機能

表1は、学生が理想とする教師のリーダーシップにおけるP機能とM機能についての平均値と標準偏差を示したものである。P機能とM機能の間についてF検定を用

表1 学生が理想とする教師のリーダーシップの機能の平均得点と標準偏差

P機能	M機能
17.80	18.80
4.00	4.74

イタリックの数値は標準偏差

いて検定した。その結果、 $F(1,48) = 3.89$, $p < .10$ となり、明確な有意差は見られなかったが、10%水準での有意傾向を認めることは可能だった。この結果は、教員を志望する大学生は、P機能よりもM機能がある教師になることを理想としている傾向がある可能性が示唆された。

(2) 理想とする教師のタイプ

表2は、学生が理想とする教師のタイプをP機能とM機能の高低の組み合わせによって、P機能並びにM機能の平均点に基づき、PM型、P型、M型、pm型に分け、それぞれの人数と割合を示したものである。学生が理想とするタイプの人数について χ^2 検定をしたところ有意ではなかった($\chi^2(3) = 2.03$)。この結果は、学生が理想とする教師のタイプの比率に差が見られなかったことを示している。

2. 理想とする教師像に影響する要因

(1) 理想とする教師のリーダーシップの機能と性格特性との関係

表3は、5つの性格特性と理想とする教師像の関係を表にしたものである。各性格特性について高得点の者と低得点の者が、P機能とM機能のどの機能を優位とする教師を理想とするのかを示したものである。

表2 理想とする教師像のタイプと人数・割合

理想とする教師のタイプ	人数	割合 (%)
PM	16	32.65
P	10	20.41
M	13	26.53
pm	10	20.41

表3 性格特性と理想とする教師像 (平均と標準偏差)

高		低	
P	M	P	M
外向性			
18.44	17.37	19.23	18.32
3.82	3.26	5.64	4.7

安定性

18.85	17.56	18.73	18.09
3.94	2.74	5.57	5.12

開放性

17.05	17.1	20	18.28
4.17	3.35	4.74	4.33

勤勉性

18.27	17.63	19.63	18.05
3.4	3.51	5.24	4.66

協調性

19.28	17.83	18.1	17.75
3.4	3.2	6.12	4.94

上段の数値は平均値、下段の数値は標準偏差

これについて、性格特性×理想とする教師のPM機能の分散分析を行った。表4は、それぞれの要因のF値と有意性を示したものである。その結果、PM機能の主効果は「勤勉性」で有意であり、「外向性」「情緒安定性」「協調性」で10%水準での有意傾向が認められた。これらの結果は、「勤勉性」「外向性」「情緒安定性」「協調性」の性格特性の強い者ほどP機能よりもM機能がある教師を理想としていることを示している。

表4 性格特性×理想教師像におけるPM機能の分散分析におけるF値と有意性

	df	外向性	情緒安定性	開放性	勤勉性	協調性
特性	1	0.54	0.03	3.19+	0.56	0.28
誤差	47					
PM機能	1	3.71+	4.55+	2.75	4.51*	3.05+
特性×機能	1	0.03	0.41	3.09+	0.82	1.14
誤差	47					

+ : 10%, * : 5%

また、開放性において性格特性とP・M機能の交互作用は有意であった。図1は、開放性の強さとP機能・M機能との関係を図示したものである。これについて個々の差を検定したところ、以下のような結果が認められた。P機能については、開放性の得点が高い者と低い者の間で有意差が認められなかった ($F < 1.00$)。しかし、M機能については、開放性が高い者よりも低い者の方が有意に理想な教師像とする傾向がみられた ($F(1,47) = 4.85, p < .05$)。

(2) 性格特性から見た理想とする教師のタイプの分析

表5は、学生が理想とする教師像と性格特性との関係を示したものである。これについて、P機能とM機能を参加者間要因、性格特性を参加者内要因として混合型の分散分析を行った。その結果、性格特性の主効果が有意であった ($F(4,180) = 7.65, p < .01$)。この結果は、開放性、情緒安定性、勤勉性が有意に強いことを示している。

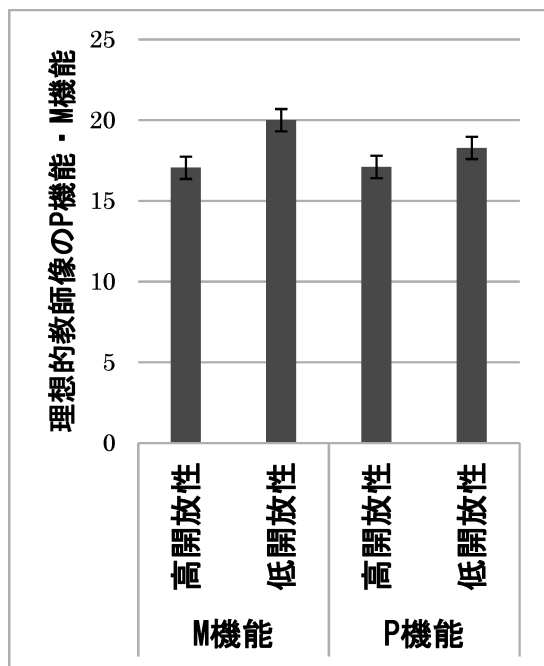


図1 学生の開放性と理想的教師のP機能・M機能との関係

表5 各性格特性による理想的教師のリーダーシップのタイプ

P・M	P	M	p・m
外向性			
15.31	14.80	14.46	12.60
2.87	3.06	2.98	2.62

情緒安定			
16.06	15.30	15.08	14.60
3.11	2.10	1.98	2.97
開放性			
17.81	16.00	16.85	14.70
2.13	2.37	2.03	3.58
勤勉性			
16.69	14.90	15.92	14.85
3.65	1.04	2.37	4.84
協調性			
13.78	14.20	13.69	14.60
3.27	3.54	2.43	4.25

上段の数値は平均、下段の数値は標準偏差

また、P機能×性格特性の交互作用は10%水準での有意傾向を認めることは可能だった。 ($F(4,180) = 2.20, p < .10$)。P機能×性格特性の交互作用が有意傾向であったので、図2は、理想とする教師像 (P機能) と性格特性の強さの関係を図示したものである。これについて個々の差を検定したところ、協調性や外向性の得点の高い学生よりも、情緒安定性、開放性、勤勉性の得点の高い学

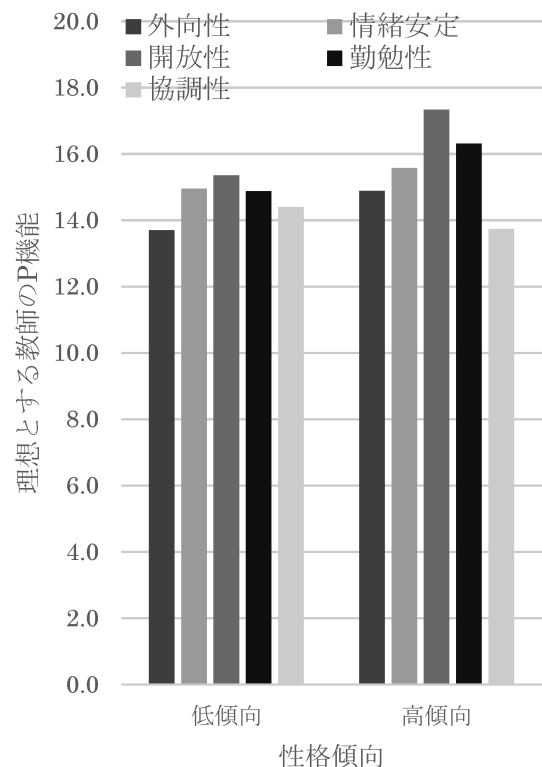


図2 理想とする教師像 (P機能) と性格特性の強さ

生の方が、理想的教師のP機能に対する期待が有意に大きいことを示していた。また、開放性の高い学生と低い学生の間でP機能に有意な差が見られた。

3. 理想とする教師像のPM機能と性格特性との相関係数

表6は、理想とする教師像のPM機能と性格特性との相関係数と有意性を示したものである。まず、P機能については、有意な関係にあった性格特性は見られなかった。しかし、P機能と外向性と開放性は10%水準での有意傾向を認めることは可能であった。他方、M機能については、有意な相関関係が見られた性格特性は、開放性であった。また、外向性がM機能との相関関係は、10%水準での有意傾向を認めることは可能であった。

考 察

本研究の主な結果は、以下の通りであった。(1) 教員を志望する大学生は、P機能よりもM機能がある教師になることを理想としていることが認められた。(2) 学生が理想とする教師のタイプには、P型やpm型よりもPM型とM型が多かったが、有意な差が見られなかった。(3) 「勤勉性」「外向性」「情緒安定性」「協調性」の性格特性の強い者ほど、P機能よりもM機能がある教師を理想としていた。(4) P機能については、開放性の得点が高い者と低い者の間で有意差が見られなかったが、M機能については、開放性が高い者よりも低い者の方が理想的教師像とする傾向がみられた。(5) 協調性や外向性の得点の高い学生よりも、情緒安定性、開放性、勤勉性の得点の高い学生の方が、理想的教師のP機能に対する期待が有意に大きいことを示していた。また、開放性の高い学生と低い学生の間でP機能に有意な差が見られた。(6) P機能と有意な相関が見られた性格特性は、外向性と開放性であった。M機能については、有意な相関関係が見られた性格特性は、開放性であった。また、外向性がM機能と相関関係が有意な傾向が見られた。これ

らの結果を中心に以下考察したい。

まず、教員を志望する大学生は、理想とする教師としてP機能のM機能のどちらを重視するのであろうか。本研究では、大学生が理想とする教師のリーダーシップのタイプについて、有意差は見られなかったが、P型やpm型よりもPM型とM型が多かった。また、P機能とM機能を比較した分析では、P機能よりもM機能がある教師になることを理想としていることが認められた。これらの結果は、教員を志望する大学生の多くが、M機能のリーダーシップの強い教師を理想にしていることを示している。

この結果は従来の研究結果と異なる。保坂(2004b)では、高校生は、M機能よりもP機能の強い教師を期待していることが示唆されている。それに対して本研究ではP機能よりもM機能の強い教師を期待していることが示された。なぜ高校生はP機能を重視し、大学生はM機能を重視していたのであろうか。この原因として、高校生と大学生の視点の違いが、理想とする教師像の違いと考えられる。教えられる立場の高校生と教員を志望する大学生では、理想とする教師像に違いが生じたのであろう。すなわち、高校生は、学級集団の構成員並びに学習者の視点から理想とする教師を見ているのかもしれない。たとえば、小柴・武田・村瀬(2014)は、中高校生は「わかりやすい授業をしてくれる先生」を理想とする教師像としていることが認められた。授業をわかりやすく学習を促進させるP機能を重視する教師を期待している。

他方、本研究の大学生は教員を目指している。教師を目指している大学生は、学級経営並びに教授者からの立場として教師を見ているのかもしれない。たとえば、石崎(2014)は教員を目指す大学生は、教職に対して高い理想像を持っていることを示している。さらに松永(2015)は、教員を目指す学生は基本的には優しい教師を求め、親身になって子どもの相談に乗るなどM機能の強い距離の近い教師を理想的な教師像としていることを示唆している。また、佐藤・篠原(1976)は、小学生を対象に担任教師のPM機能が学級意識や学級の雰囲気にとどのような効果を持つかを検討している。その結果、P機能に比べM機能の影響が強いことを報告している。また、紅谷(1976)は、子どもが教師のリーダーシップをM機能が強いと認識した時に、子どもの学校への関心、級友等の関係、学習意欲が優れることが示されている。このことは、学級経営の観点からも、M機能が重要であることを示唆している。

次に、どのような性格傾向の学生が、M機能を持った教師を目指すのであろうか。本研究では、開放性と外向性の性格特性がM機能と強い相関関係が認められた。ま

表6 学生が理想とする教師のリーダーシップの機能と性格特性との相関

	P	M
外向性	0.25+	0.25+
情緒安定	0.17	0.09
開放性	0.26+	0.29*
勤勉性	0.04	0.07
協調性	0.03	-0.06

+ : 10%, * : 5 %

た、分散分析では、勤勉性・外向性・情緒安定性・協調性の性格特性の強い大学生ほど、M機能の強い教師を理想としていた。すなわち、真面目で、外向的で、情緒が安定し、協調性のある学生ほど、M機能を持った教師を理想と考えていることを示している。

また、本研究の結果は、教員を目指す学生がM機能を持つ教師のみを目指している訳ではないことを示している。たとえば、本研究では、情緒安定性、開放性、勤勉性の得点の高い学生が、理想的教師のP機能に対する期待が有意に大きいことを示していた。また、外向性と開放性の2つの性格特性はP機能と有意な傾向の相関が見られた。全体的に10%水準の有意傾向の結果が認められた。この原因として、研究協力者の少なさが考えられる。この点については、今後検討すべき課題である。

これらの結果を要約すると、外向性、情緒安定性、勤勉性の強い学生は、M機能だけでなく、P機能の強い教師を理想とし、協調性の性格特性の強い大学生はP機能よりもM機能の強い教師になることを期待し、開放性の強い学生は、M機能よりもP機能の強い教師になることを期待していることを示している。

コミュニケーション能力が高い学生（外向性）、心理的に安定した学生（情緒安定性）、向上心のある学生（勤勉性）は、子どもの力を伸ばすP機能と子どもの気持ちを理解するM機能を持った教師を目指しているのであろう。新しい経験や知識を求める大学生（開放性）は、学習することに特化し、子どもの学習目標を達成させるP機能を持った教師を目指しているのであろう。人間関係を重視する大学生（協調性）は、子どもとの関係や集団の雰囲気を持続するM機能を持った教師を目指しているのかもしれない。それぞれの学生の性格特性が、教師における機能についての異なった価値観を生じ、その価値観を媒介として目指す教師をイメージしているのかもしれない。いずれにしても、この解釈は仮説であり、今後さらなる検討が必要であろう。

引用文献

青木邦男（2011）和田及び村上・村上の主要5因子性格特性尺度の因子構造の検討 山口県立大学学術情報、4、27-40。
紅谷博美（1976）子供が認知した親及び教師の指導類型とスクールモラル・情緒安定・学業成績との関係 愛媛県教育センター教育研究紀要、37、41-45。

保坂芳男（2003a）普通科高校英語教師の資質に関する実証的研究 高校英語教育研究、17、28-42。
保坂芳男（2003b）中学校英語教師の資質に関する実証的研究 中国地区英語教育学研究紀要。
保坂芳男（2004a）理想的な英語教師像に関する実証研究：普通科高校生と中学生の比較を通して 広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域、52、127-133。
保坂芳男（2004b）理想的な英語教師像に関する実証研究（2）：PM理論を用いての生徒の学力差による構造比較 広島大学大学院教育学研究科紀要、53、181-186。
石崎園子（2014）大学生の教職に対する理想像と現実像の関連性：教員志望者の教育実習前後における変化を通して 創価大学大学院紀要、36、279-304。
亀川順代（2005）日本語教師養成講座受講生における性格傾向と形成について：内的・外的要因による分析から 日本教育心理学会総会発表論文集、47、108。
河野義章（1987）教室内での教師の非言語的行動：教師の性格特性と姿勢との関係 日本教育心理学会第29回総会発表論文集、29。
河野義章（1988）教師の性格特性と授業中の姿勢との関係 日本教育心理学会第30回総会発表論文集。
小柴孝子・武田明典・村瀬公胤（2014）中・高校生が求める理想の教師像：「教職実践演習」カリキュラム開発のため 神田外語大学紀要、26、489-509。
紅林伸幸・中村瑛仁・井上剛男・長谷川哲也（2012）子どもの環境としての教師：その資質能力の基本構造：小学生・保護者・教師を対象とした質問紙調査の結果から 滋賀大学教育学部紀要教育科学、62、163-173。
松永幸子（2015）教職を目指す学生の教師についての意識：教師という仕事の魅力と児童生徒とのかかわり方、研修とプライベート、今後の教師のあり方にかかわって 埼玉学園大学紀要 人間学部篇、15、67-76。
三隅二不二・吉崎静夫・篠原しのぶ（1977）教師のリーダーシップ行動測定尺度の作成とその妥当性の研究 教育心理学研究、25、157-166。
小川一夫（1979）学級経営の心理学 北大路書房。
佐藤静一・篠原弘章（1976）学級担任教師のPM式指導類型が学級意識及び学級雰囲気にか及ぼす効果：数量化理論第Ⅱ類による検討 教育心理学研究、24、235-246。
杉原一昭・桜井茂男（1987）児童の内発的動機づけに及ぼす教師の性格特性およびリーダーシップの影響 筑波大学心理学研究、9、95-100。
豊田弘司・三木馨（1996）理想的教師像における大学生と教師の違い 奈良教育大学教育研究所紀要、32、133-136。
山根文男・木多功彦（2013）理想の教師像についての調査研究（2）：学校長等のインタビューから 岡山大学教師教育開発センター紀要、3、90-97。

What Factors of Personality Affect on Types of Teacher of Students Who Want to Become a Teacher?

Haruo Kikuno* Yuichiro Kikuno** Qi Li*** Satoshi Yamada*

* *Shizuoka Sangyo University*

** *Nagasaki University*

*** *Tokyo University*

The first purpose of the research was to clarify what kind of teacher students want to become. The ideal image of teacher was measured by using P and M function based on PM theory. The second purpose was to clarify how the personality trait of students affect their ideal teacher image. Personality traits including conscientiousness, extraversion, neuroticism, agreeableness, openness were measured based on Big Five theory. The results show that students who aim for teachers want to be teachers with M functions rather than P functions. However, the previous research showed that high school students expect a teacher with P function rather than M function. It was assumed that the contradiction of the results would be caused by the difference between the viewpoints of high school students and university students. The result also showed that students with strong extroversion, neuroticism, and conscientiousness wanted to become a teacher not only with M functions but also with P function. The result showed that students with strong agreeableness wanted to become a teacher of M function although students with openness wanted to become a teacher of P function. It suggests that the personality trait of the student caused different values on the teacher.

Key words : ideal image of teacher, peronality traits, PM theory, Big Five, teacher training

